

【論文】

余暇としての「旅」の持つ意味
 ——高齢者の「旅行・観光」に関する質的調査から——

中 溝 一 仁

1. はじめに

1. 1 高齢社会における余暇研究の意味

世界でも例を見ない高齢社会である我が国の現状には取り組むべき多くの課題がある。その中でも余暇について研究する意味とは何であろうか。一つは、余暇活動を通して人々の生活の満足度を高める可能性を明らかにすることである。今や人口の4分の1以上を高齢者が占めているが¹⁾、高齢化率の上昇以上に高まっている高齢者の犯罪率は見過ごすべき問題ではない²⁾。また、経済的には豊かな日本であるが³⁾、世界の中では生活の満足度は決して高くなく、まだまだ向上させる余地は大きい⁴⁾。家の外に出て他の人と交流を持つような趣味の活動、すなわち「ふれあう余暇活動」(中溝 2017: 235)が広がることは、高齢者も含めた人々の生活の満足度を高め、これらの問題を少しでも小さくするものとして期待される。第二に、健康寿命が思うように延びていないという問題がある⁵⁾。平均寿命と健康寿命の差は、なんらかの介助や介護を必要とする期間を意味し、この差が縮まることなく高齢人口が増えればそれは社会保障費の増大という結果を招く。また、長期間の寝たきりの生活は、高齢者個々人のQOLという側面からも決して望ましいものではない。余暇の活動を通して少しでもこの差が縮まることが期待される。第三に、豊かな老後の有り様を後の世代に手本として提示する必要性がある。戦後、食糧事情が改善し、医療も発達し、経済的にも豊かになったはずだが、高齢者の自殺は決して少なく

ない⁶⁾。余暇の活動を通して人と関わり合うことで引きこもりや孤老を防ぎ、社会と断絶することなくいかに充実した生活を過ごすことができるか。若い人たちが老後を楽しみに期待できる可能性を示すことが大切である。

昨今、「働き方改革」⁷⁾が叫ばれている。しかし、長時間労働について言えば、労働者にとっては今に始まった問題ではない。現在緒に就いたばかりのこの改革は、労働者の過労死を防ぐことや、短時間でも働きやすい環境を整えて働く人の裾野を広げ、労働力人口を確保することが主な目的となっている⁸⁾。本稿の主題ではないのでここに紙幅を費やすことは控えるが、仮にこの改革が社会に受け入れられて浸透し、ある一定の成果を上げたとしても、それが「余暇時間」の増大に繋がることは必ずしも限らない。今回取り上げる「旅行・観光」は余暇の中でも特に「時間」を必要とする活動である。日常的な余暇活動を行うためには「日常の時間」が必要であるが、非日常的な余暇としての旅をするためにはある程度まとまった「休暇」が必要になる。フランスのように長期休暇を義務付ける⁹⁾ことを我が国に導入することの是非はともかくとして、有給休暇の活用や休暇の分散化、また子供達の通う学校休暇の分散化など、取り組むべき課題は多い¹⁰⁾。労働時間の問題は、「日々の」労働時間の短縮という側面だけでなく、上述の通り「休み方」についても検討されなければならないのである。しかし、ドラスティックに日本人の働き方が変わると考えることは、現状では難しい。若い頃に希望はあっても時

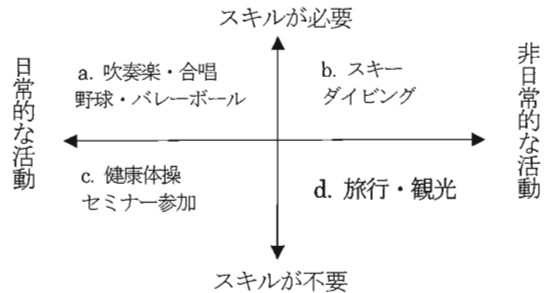
間的な制約から余暇の活動を行えないという状況は、まさに生きている「その時」の生活を楽しめないだけでなく、その後定年退職を迎えた時に初めて手にする多くの自由時間を持って余すという問題に直結する。この「余暇に対する準備のない高齢者」(中溝 2017: 223)の余暇を充実させる可能性について検討することも余暇研究の課題の一つである。

1. 2 研究の位置づけ

余暇活動の分類は様々な切り口から行うことができるが、筆者はこれまで「趣味を同じくする人が集う団体」を「趣味的サークル」(中溝 1999: 86)と名付け、これを「集団的余暇活動」と「個人的余暇活動」とに分類している。前者は音楽であれば、オーケストラ、吹奏楽、合唱など、スポーツであれば、野球やサッカーなど、いずれも参加にはある一定の技術(スキル)を必要とし、また集団として一つの目標に取り組むという特徴が挙げられる。後者の「個人的余暇活動」は、囲碁や将棋、エアロビクスやテニスなど、同じ趣味を持つ人の集まりではあるものの、全体で一つの結果を求める活動ではないため、スキルに差があっても仲間に迷惑を掛ける心配がない。したがって、この「個人的余暇活動」は同じ「集団への帰属」であっても、定年退職した高齢者が参加する際の技術的、心理的障壁は低い。また、音楽でも、カラオケやピアノなどは集団に所属する必要がなく、同様にジョギングやマラソン大会への参加も個人で行うことができる余暇活動であるので、「個別に行う」「個人的余暇活動」と言える。本稿で取り上げる「旅」もこれに該当する。

もう一つの切り口としては、「日常性」による余暇の分類である。「ハレ」と「ケ」の違いと言ってもよいだろう。ある程度定期的に繰り返される日々の活動(上述の「趣味を同じくする人が集う団体」の活動であっても、また一人で行う余暇の活動であってもよい)を「日常的余暇活動」、旅行やコンサートに行くなど、基本的には定期的

に繰り返されず、また実施にあたってある一定の金と時間を要する活動を「非日常的余暇活動」と呼んでいる。これを上述した「活動に際してスキルが必要かどうか」と組み合わせると、下図のようになる。



これは、活動に際してそれを行うための技術やスキルが必要かどうか、またそれが日常的に繰り返される活動なのか、たまにしか行われぬ活動なのか、という4つに分類される。活動の頻度が高ければ、図中のb.とd.はそれぞれa.とc.に近づく場合もあり得る。本稿で取り上げる今回の調査はd.の「旅行・観光」がその対象となる。つまり、「旅行サークル」などを除けば、基本的に集団への帰属は必要なく、また活動を実施するにあたって特段のスキルも必要としない余暇活動として旅を捉えることができる。

昭和44年の観光に関する諮問に対して、「国民生活における観光の本質とその将来像」という答申がなされている。ここでは観光は「自己の自由時間(=余暇)の中で、鑑賞、知識、体験、活動、休養、参加、精神の鼓舞等、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為(=レクリエーション)のうち、日常生活圏を離れて異なった自然、文化等の環境のもとで行なおう(原文ママ)とする一連の行動」¹¹⁾としている。日常の生活圏を離れること、つまり、非日常性がその条件として挙げられている。また、ツーリズム研究においてもこの「日常・非日常」の概念は用いられている。「ツーリズム研究で描かれるツーリスト像は、好奇心に駆られ日常の世界から非日

常世界へ赴く人間、というものであろう。人は非日常世界でリフレッシュしたり癒されたりして日常世界に帰還する。(中略) リピーターにとって非日常世界は、第二の日常世界と化してきている」と『新ツールズ学原論』では述べられている¹²⁾。ここでの指摘の一つは、「旅行」を「非日常」と定義してそれ以外を「日常」としていることである。ここで言う「日常」とは主に人間性の回復を必要とする「苦役としての労働」を前提としている。したがって、日常から解放されることが大切であり、「緊張と弛緩」の関係で見れば、「弛緩」に該当するのが「旅行」ということになる。もう一点は、「非日常の日常化」である。これは余暇に限らずあらゆる分野において起こり得る問題である。「非日常」は、希少であるがゆえに通常と異なるので、頻度が高まれば「非日常」の「日常化」は誰にとってもあり得ることである。実際、今回の調査でも旅の頻度が高い人にとってはその希少性が薄れ、旅が日常的であるとする回答が得られている。このように旅の持つ「日常生活からの離脱」や「非日常性」という性質は、その余暇活動が与える満足感への影響を考える上で重要なポイントである。

1.3 本稿の目的

大きな目的としては「人生の後期に生活や人生を充実させる手段としての旅の価値」を明らかにしたいと考える。これを前提として、具体的に以下の3点について今回実施した調査の回答をもとに検討を行う。

第一に、高齢者の旅が「非日常的な余暇活動であるか」という点である。上述したように筆者はこれまで余暇活動をその活動内容で「日常的か、非日常的か」に分類している。「非日常的余暇」の活動は、その希少性によって満足度が高められるという側面があるが、労働から解放された高齢者の場合、余暇は「余った暇」ではなく単なる「暇」でしかない可能性もあるのだ(中溝 2005: 60)。この場合、旅行から得られる満足度が限ら

れることが考えられる。以上のような理由から、高齢者の旅が非日常的な活動であるかどうか、またそれが与える満足感について検討を行う。

次に、ライフサイクルによって旅がどのように変化したのかについて考察する。若いうちは「金」、現役就労時代は「時間」、高齢世代は「健康」が旅の実施に際して欠きやすい条件であり¹³⁾、また、学生、社会人、結婚、子育て、定年退職など、その人の置かれる生活状況の変化によって旅の内容や意味づけも変わってくるのが予想されるが、実際のところどうであるかを考察する。

最後に、高齢者の行う旅の意味、なぜ人は旅をするのか、についてその目的や理由を検討する。もし、高齢者の旅に何らかの特別な意味や価値が含まれているとしたら、健康や経済的な理由からそれを実施することが困難な人々は、それを他の余暇で代替できないことになる。この旅の意味を問うという大きな課題のすべてに答えることは難しいが、「生活の満足度」という視点を重視しつつ、量的調査では浮かび上がらない「その人にとっての旅の意味」について、今回の調査からその一端を明らかにしたい。

2. 調査の概要

調査は2017年8月から11月までの4ヶ月間に12名から、それぞれ1時間から2時間弱話を聞くことができた。対象は現役当時の職業的な社会階層が比較的高く(現在も就労している人も含む)、現状で生活における経済的なゆとりが大きいと思われる60歳以上の男女である。調査対象者はすべて静岡市在住で、調査もすべて同市内で実施している。調査を行った静岡市は人口が70万人弱と政令指定都市の中では最も人口の少ない都市となるが、「3%経済」¹⁴⁾や「全国10番目の都市」と言われるように、全国の中でも比較的中間的・平均的な都市である。すべてにおいて代表的であるとは言えないが、大都市でもなく、極端

に小さい地方都市でもない。今回の調査では「高齢アッパークラス」をその対象としたが、その理由は「旅行・観光」を行うために必要不可欠な「金」と「時間」を持っており、また、旅行を「する自由」と「しない自由」の両方を持っていると考えたからである。ストックやフローを具体的に確認できたわけではないものの、質問の回答内容から今回の対象者として相応しいことは確認できている。なお、各回答者と回答の概要、質問項目は文末に掲載する。本調査を行うにあたって、以下の仮説を立てた。

1. 旅が手段である場合と、目的である場合がある
2. 旅行は非日常的な行為であり、それが生活満足度の向上に寄与している
3. ライフサイクルによって旅の行為やその意味が異なる
4. 高齢者にとっての旅は「義務が含まれない」純粋な余暇活動である

仮説1については、観光など、旅そのものが目的である場合と、旅が何らかの別な目的を果たすための手段として行われているケースがあるのではないかと推測されるからである。仮説2とも関わってくるが、日常生活からの脱出のために旅行が行われる場合は、「どこに行くか」は大きな問題ではなく、「旅に行くこと」自体が目的であると捉えることができると同時に、その行為を「非日常性を味わうための手段」と考えることもできる。したがって、明確な切り分けが難しいケースもあり得るだろう。仮説2については、人々の日常生活には労働などの義務があり、それらから解放された活動が一般的に余暇活動とされ、旅行や観光は通常、非日常的な活動と捉えられている。筆者は余暇の中にも日常性と非日常性があると考えているので、特に労働という義務を持たない高齢者の旅行をアプリアリに「非日常的な余暇活動」と捉えてよいかについて検討し、またそれが

人々に与える満足感とは日常的な余暇活動と比べてどのように異なるかを検討する。仮説3については、年齢や仕事の状況、子育てなど、ライフサイクルによって同じ「旅」という行為でも、その持つ意味が異なることが考えられるため、実際のところはどうであるかを見ていく。仮説4については本稿の趣旨とは異なるため割愛する。

なお、調査の対象をアッパークラスにした理由は、上述のものとは別にもう一つある。経済的にゆとりがあり、ある一定の社会的地位を持つ（持っていた）人の考え方やメンタリティ、余暇活動へのアプローチを把握しなかったという点である。過去に実施した「趣味的サークル」に関する量的調査（中溝1999）では、集団の余暇活動を行っているグループを調査対象としたが、その参加者のほとんどは中間層、もしくはそれよりも若干上のクラスに属していた。結果としてその時の調査は中間階層の余暇活動の実態を知ることになった。今後、より大きな問題となることが予想される貧困層の生活の満足感や、社会の一員として参加する余暇活動の可能性について検討する際の比較のためにも、上位の層にいる人たちの「語り」に触れたいと考えたのである。

3. 高齢者の旅は「非日常的な余暇活動」か

旅行や観光は一般的に非日常的な活動と捉えられているが、労働のない高齢者にとってもそれが当てはまるのか、また旅の頻度や、日常的な「余暇活動」の取り組みによっても違いが出てくるのであろうか。

旅行は、それをするのに必要な健康があれば年齢は問題ではなく、金と自由時間の有無が問題となる。今回は比較的経済的に余裕がある層を対象としたため、金ではなく旅をする時間がポイントとなっていた。仕事にせよ、趣味の活動にせよ、そこに多くの時間が費やされていれば長期間の旅行を頻繁に行うことはできない。実際、フルタイムで働いていた人は長期休暇以外には2泊以上の

旅行には行ってないし、劇団の活動が忙しかったJ氏(74歳男性)も短い旅行には行っていたものの、「(劇団をやめることで) やっと解放され、(これから) もっと自分のために気ままに旅をしたい」と述べている。一度定年を迎えた高齢者であっても、その後フルタイムで仕事に従事している限りはなかなか長期の旅行は行きづらい現実がある。現役就労世代と同じ、もしくはそれに近い忙しさであれば余暇を行うための時間の確保は難しく、またハレとケの境も明確である。その意味において、仕事に就く高齢者にとって旅は非日常的な活動に分類される。

しかし、頻繁な旅は、それが持つ非日常性を奪っていく。旅に出れば出るほど、その行為は日常生活の一部に近づいていくのである。C氏(77歳男性)の回答は、これまで旅行・観光を「非日常的余暇」として分類してきたアプローチに再考を迫るものであった。彼はインタビューの冒頭で「私にとって旅は人生そのもの」と話す。マスメディア関係の仕事をしていたため、もともと国の内外を問わず飛び回っていたが、引退した現在もそれは変わらず、月の半分は旅に出ており、そのうちの3分の1は海外旅行である。在職中から旅が好きで、それは今も同じであるという。彼は「旅行は日常的な活動である」と言い切るが、確かにこれだけの頻度で旅に出掛けていれば旅行を特別な活動とは呼べないであろう。旅をする目的は、コンサートに行くこと、様々な社会的活動に関連した視察、また退職後に興じた会社と社団法人の活動に関する出張など様々であるが、ビジネスという観点から見ると「仕事色」は比較的薄いようで、かなり自身の興味を中心とした旅である。しかし、出掛ける際には何らかの観光以外の目的があり、「余暇だけの旅は少ない」と述べている。

同じ旅でも当人の意識でその分類が変わる場合のあることが確認された。ゴルフを目的とした旅行はかつての仕事関係の仲間と行くため、感覚的には日常的な活動であり、妻と行く演奏会を目的とした旅は非日常的な活動だとするE氏(70歳

男性)の回答がある。彼は行う活動の内容で「日常的か、非日常的か」が決まるという。いずれの活動も、その実施頻度はあまり変わらない。昔の仕事関係の人と行くゴルフを目的とした旅行の方が、身内と行く旅よりも非日常的であると捉えがちだが、実際には妻と行く演奏会を「非日常的」とするのである。活動内容や誰と行うか、また活動頻度などによって「日常的か、非日常的か」を客観的に判断したいところだが、それを行う本人の気持ちによる分類もあり得ることが理解できる。

旅が生活の満足感の向上に寄与しているかという点に関しては、そうであると言えそうだ。高齢者の旅には、現役就労時代の出張や家族サービスなどのような強制力や義務感はないので、嫌ならそもそも出掛けたりしていない。したがって、繰り返し旅行をする人はそれが楽しいからするのであり、実際に行く前からとても楽しみにしている。「(高齢者になった現在は)旅行が楽しみ」(B氏:69歳女性)、「お花を見に(旅行に)行く(ことが楽しみ)。今は紅葉(の時期)だから(それを見に行きたい)」(L氏:72歳女性)、「(今の楽しみは)いろいろなことを知ること。どっか行って『おーっ』と気がついたりすること」(K氏:62歳男性)など、旅の前から生活の楽しみをしているという回答が多く見られた。

生活の満足度に関して気づいた点がある。現在の生活に関する質問の回答において、多少の「不安」はあっても「不満」が極めて少ない点が特徴的であった。今回の対象者の社会階層や、その人の現在の経済的なゆとりがプラスに影響していると考えられ、皆概ね現在の生活には満足している。「今、精神的に楽で満足している」(B氏)、「満足している。90%以上の満足度。それ以上望んでいない。不満はない」(C氏)、「非常に高いと思う。不安、不満はない。前職の時の方(自分の会社を退職後に起業し、現在は再び代表取締役となっている)が責任が大きく、不安があった。今の方が楽になった」(E氏)、「まあ満足している方だろうな、百点満点とはいかないが。妻の体調や息子

が離婚したことなどが多少心配」(J氏)、「満足している方だと思う。言えば不満がないわけではないが、総じて満足している」(F氏：77歳男性)など、全般的に満足度が高いという回答が多く得られている。高齢者の日常生活に関する満足度はトレンドとして低落傾向にあるとは言え、平成26年度調査で「満足している」と「まあ満足している」の回答の合計は68%¹⁵⁾である。それと比べても今回の対象者たちは一様に生活に満足している。これは今回の調査が経済的にゆとりのある層を対象としたからとも考えられるし、健康で旅行にいける環境・状況にあるからとも考えられる。今回の質的調査からその点を明らかにすることはできないが、「旅行」に対するニーズの大きさを考えると、それが満たされている人の日常生活に対する満足度が高いことはある意味当然ではあるが、余暇活動としての「旅行」が生活の満足度を高めていることは疑いの余地がない。

4. ライフサイクルによる旅の意味の違い

ライフサイクルの変化は、旅の目的や意味にどのような違いをもたらすのか。また、それは具体的にどのような気持ちや活動の変化として表れてくるのだろうか。これらについて仮説の検証とともに見て行く。

まずは性別による違いの可能性を指摘する。一般的に女性は男性よりも結婚、出産を契機とした退職や、夫の仕事の状況や転勤などの影響を受けることが多い。これは広い意味でのライフサイクルとも言えるが、性別によるものと捉えることもできる。H氏(68歳女性)は専業主婦で、L氏は自営業の妻で仕事も手伝いながら家事を行う、という点でこの二人の女性は夫や家庭環境の影響を強く受けている。H氏は夫が早期に自営の仕事から引退した後、夫と共に突如頻繁に旅行に出掛けるようになり、L氏は自営の仕事(店)の手伝いと姑との関係から、子育て期間も含めて若いうちにはほとんど旅行に行けず、年を取ってこれらの

障壁が低くなってから徐々に旅をするようになっていく。

同じ女性であっても、会社経営者のB氏と仕事上のキャリアを重ねるI氏(68歳女性)は、旅行に対する関わり方は男性と同じような分類が可能である。二人とも忙しく働き、旅行へのハードルが時間という点で現在も働く他の男性と同じであった。このことは、その人の持つ「自由時間」がその人の「旅の意味」をある程度規定することを示唆する。つまり、生物学的な性差ではなく、労働状況やその結果としての余暇可能時間の違いの方が「旅行」に対するアプローチに影響を与えているのである。

ライフサイクルによる「旅の意味」の変化は、結婚と子育て、子供の巣立ち、定年退職など、日常生活での大きな変化がそのきっかけを与えている。働いている時は仕事の関係での旅が多かったが、現在は退職したため旅の位置づけが変化したという回答が複数見られた。E氏は、40～50歳代は取引先との旅行が多く、仕事の一環として行くという意識が強かった。しかし、接待とはいえ義務的な負担感はなく、(社員に対して旅行に行くための)言い訳にはなっていたという。当時は、言い訳のいらぬ旅は土日の1泊2日しかできなかったが、現在は誰にも気兼ねをすることなく旅行ができるようになっている。「昔は(仕事上の)会の趣旨や目的があったが、今の旅行は自分の歩んだ道を確認しながら(旅する)、という感覚」だとG氏(73歳男性)は答えている。「家族の形が変わったように、旅行の形も変わってきた。(かつて)仕事で知り合った関係が、そのままプライベートの関係として残って」おり、現在はその人たちを中心に年間6～8回くらい旅行に出掛けるという。仕事上の旅とプライベートの旅行ではそもそも目的が異なるのだから意味づけも異なるとは当然だが、この時期は仕事に絡まない純粋な個人的旅行はなかなか実行できなかったという。

現役就労時代は仕事の出張か家族旅行ばかりだったが、現在は海外も含め純粋な個人の楽しみ

として旅行をしているというK氏は、「(昔から) 目的なく出掛ける旅はない。『そうだ京都に行く』は(自分には)ない」と断言する。彼は「目的を持って出掛けているという点で一貫している」と回答しており、その点で旅に対する意識の変化はない。一方、A氏(64歳男性)の旅の位置づけは自分自身の中では変わっていないものの、サラリーマン時代の家族旅行の際は常に頭から仕事のことが離れなかったという。それから比べれば現在(NPO法人理事長)は、仕事のことを気にせず旅に出ることができるようになっているという。

もともと旅行が好きだったが、自分が子どもの頃に親に旅行に連れて行ってもらった記憶がほとんどないと回答したI氏は、仕事での出張が非常に多く、その意味において旅に出掛けるという行為は子育て中も変わらず続いていたが、その形態と意味づけはライフサイクルによって大きく変化している。彼女は28歳で結婚するまでは頻繁に一人旅をしていた。ちょっとした時間があれば(静岡から)京都へ日帰りでも行ったりしていたという。しかし、結婚、出産を経て子育て期間中、出張以外の旅は専ら家族旅行で、「当時は観光目的で行きたいところに行くことはできなかった」と述べている。この時期の旅は自らの欲求を満たす目的ではなく、「お世話になった人への感謝や子供達に淋しい思いをさせないため」であり、自らの余暇活動であるという考えは皆無である。子供が大きくなるにつれて、仕事での出張時に有給休暇を1日加えて一人で観光を楽しむ機会が増えたという。定年退職後もフルタイムの仕事に就いているが、夫も退職し、自分自身も多少は仕事を減らしたので、現在は自分の休みに合わせて夫婦で旅行に出掛けている。彼女の旅はライフサイクルによって明確にその位置づけが異なっている例である¹⁶⁾。

F氏は昔と今の旅の違いについて「昔は暇と金がなかったので、それを作り出すことが大変だったから、それだけ値打ちがあった。今は暇と金が

あるので当時よりもありがたみが減っているような気がする」と話す。この回答は余暇活動の満足度に関わる重要な示唆を与えている。現在の満たされた状況で行われる旅よりも、若い時に「苦勞して手に入れた余暇活動」の方が喜びも一入なのである。彼は上場企業の子会社の社長を10以上こなし、75歳まで現役で働いていた。年齢とともに徐々に仕事量を減らしてきたとはいえ、まだ本格的な余暇生活が始まったばかりである。彼の回答から、「義務としての労働」がないことで余暇活動による満足感が制限されることもあり得ることが考えられる。今後、義務を伴う労働を多少なりとも持っている高齢者との比較を行う必要があるだろう。

想定外だったのは、若い頃の旅の方が贅沢だったという回答が複数あったことである。出張の際の移動が「グリーン車」であったり「ビジネスクラス」であったり、ホテルのグレードが高かったり、ということがあったという。これには次の2つの理由が挙げられる。一つは、その時期である。バブル期で企業が潤沢に金を使うことができ、その時に彼らが中堅社員として働いていたことが背景としてある。もう一つは、この時期に「接待されている側」だったという点が指摘できる。バブル期に会社同士の付き合いの中で役得として贅沢な旅ができていたのである。彼らは現在でも時と場合によって新幹線のグリーン車や航空機のビジネスクラスを利用するが、最近は公共の移動手段には多くの高齢者割引があり、経済的なゆとりがあっても、皆それらを活用していると述べている。一方、宿には基本的にあまり大きな金を掛けてはいないようであった。しかし、孫と泊まる時は別である。夫婦で泊まる時にはそれほど金は掛けないというI氏も、孫と出かける際は高級旅館に泊まるという。これは、孫との旅が、夫婦とのそれと意味や目的が異なっていることを示している。孫ができたことによって旅が変化したという意味では、ライフサイクルの変化の一つとも捉えられよう。

5. 人はなぜ旅をするのか

今回の調査では、観光目的や旅や旅行自体が目的というケースよりも、旅が手段になっているという回答が多かった。「結婚〇周年を記念した旅行」だったり、「妻との共有体験を増やすこと」だったり、何らかのテーマを持って探求をするという目的を持っていたり、演奏会に行ったり、ゴルフが組み込まれた旅行であったりして、旅を純粹な観光目的と回答したのはクルージングに頻繁に出掛けるH氏くらいだった。現役でまだ忙しく働いているI氏は、仕事を引退したら（もしくは仕事量を減らしたら）観光目的でもっと旅をしたいという希望を持っていたが、現状ではあまりできていない。しかし、世の中には「バック旅行」や「ツアー旅行」なども数多く存在する。「純粹な観光」目的の旅をする人もたくさんいるはずだが、今回は該当する人があまりいなかった。社会階層や職業上の役職、経済的なゆとりなどの影響が考えられる。

K氏は次のように述べている。「目的がないと観光をする気にならない。例えば被災地を確認する、とか」。「物見遊山としての観光自体にはあまり興味がない。例えば、『座禅を組む』、『御朱印をもらう』、『(その地の)食(を探求する)』など」。海外に行く時にもテーマを必ず作っている。中央ヨーロッパに行った際は、「ユダヤ人とは何者か」というテーマを持って出掛けている。これらの旅は妻と一緒にだったが、自分が抱いているテーマについては「妻には話していない」。あくまで自分だけの目的だという。また、「行く前に予め本を読んで勉強しておく。そうすると視点が増えて面白い」とも述べている。充実した下調べをすることにより、結果として行った先での観光をより深く楽しむことができているのである。

子供の頃から青年期、そして子育て期間もほとんど旅をしてこなかったというH氏と旅との関係は非常に特徴的であった。もともと旅をする習慣はなく、また希望も特段持ってはならず、「それ

ほど旅行が好きだったわけではない」と回答している。しかし、60歳を過ぎてから急に夫と頻繁に旅行をするようになった。「元気なうちにたくさんいろんなところに行ってみよう」と夫婦で決めた」という。このように、「身体が言うことをきくうちにいろいろ出掛けておく」という話は他の回答者からも得られている。H氏の夫婦の旅行はかなり頻繁で、現在でも年間に6回程度、国内を中心にツアー旅行やクルージングの旅をしている。以前ほどではないが、海外にも行っている。その際は夫が長時間の飛行機に身体的に耐えられないため船旅だという。彼女からは、これらの旅が積極的な余暇の活動であるという雰囲気は感じられなかった。「これからやってみたいことはあるか」の問いに対しては「別にない」と答え、「今後行ってみたいところはあるか」の問いに対しても「二人とも飛行機は乗りたくないし、地中海クルーズも（治安的に）怖いから、海外は行きたくない」と答えている。「いいツアーがあれば申し込むが、特別行きたいところがあるわけではない」とも言う。これには積極的な余暇の活動というよりも、「余った暇をつぶすための活動」ではないかという感覚を禁じ得ない。もっとも、これらの旅が積極的なものではなかったとしても、それが生活満足度の向上にまったく寄与していないかと言えば、そのようなことは決してない。行きたくなければ行かない自由はもちろんあるし、積極的な夫に単についていっている訳でもない。「行く前から楽しみ」とも言い、行けばそれなりに高い満足感を得て帰ってきているのである。この旅に対する執着心の少なさは、かなりの頻度で出掛けているために旅が日常的な活動になりつつあり、「ありがたみ」が少なくなっているという側面もあるだろう。頻度の高まりによって非日常性が低くなることに伴って、旅行の希少性や「ハレ」の度合いも低くなり、ひいては活動の満足度も下がっているのかもしれない。ちなみに、彼女の老後の生活の特徴は、「日常的余暇」と「非日常的余暇」がバランスよく構成されていることで

ある。日常的に繰り返される余暇の活動として、女性専用のフィットネスクラブに週3回、フラワーアレンジメント講座、ヨガ講座、フットケア講座にそれぞれ月に1回ずつ通っている。また、近所に孫が二人おり、面倒を見たり、幼稚園の運動会やピアノの発表会に行ったりすることをとても楽しみにしている。つまり、彼女の生活全般の満足度を高める要因（充実した日常的余暇活動と孫の存在）が複数あり、これにより非日常的余暇である「旅行」の価値を相対的に落としている可能性がある。

旅は誰と時間を共有したかも大切であるとレジャー白書は指摘しているが¹⁷⁾、まさにA氏の旅行の目的は「妻との共有体験を増やすため」であり、それは年齢やライフサイクルに関わらず一貫している¹⁸⁾。上述したが、彼は現役就労時代の旅は頭から仕事のことが離れず、退職後の旅はそれがなくなったと言う。つまり、意識の面では異なっているが、妻とともに旅に出るという行為と妻との共有体験を増やすという目的はずっと変わっていない。一方で、「元気な今のうちになるべくたくさん夫婦で旅行に行きたい」と答える人とは、同じ夫婦の旅であってもそれが意味するところは若干異なっている。なぜなら、その言葉の中は、自分達に残された時間を計算した上で人生全体の満足度を高めようとする意識が感じられるからである。

6. おわりに

6.1 調査を終えて

今回の対象者は経済的に裕福であるが、これは親から引き継がれた豊かさと、個人的な努力の結果としての豊かさの両方があった。また、当時としては大卒が多いことを考えれば、本人の努力だけではなくいわゆる「文化的再生産」も大いに関わっているであろう。いずれにしても、聞き取りをして感じた共通点として、皆「やる気」と「覇気」が非常に強く感じられた点が挙げられる。旅

に直接関係することではないが、彼／彼女らはやる気に満ちており、在職中も退職後も積極的に様々な活動に主体的に関わり、また旅行や観光についても貪欲に取り組む姿勢の人が多かった。つまり、年を取っても忙しいのである。現時点で言えることは、旅によく出る人は精神的にも健康で、活力に満ちているということである。元気だから旅に行くのか、それとも旅に行くから元気なのかは今回の調査からその答えを見出すことはできないが、高齢者における「旅行という余暇活動」と精神的な充実、すなわち心の豊かさと密接な関係にあると言えるだろう。

今回の対象者は日常的な余暇活動も活発に行っており、充実した余暇生活を過ごしていた。健康体操からゴルフ、囲碁、英語やフランス語などの語学学習、フラダンス、ピラティスなど、その活動は実に多岐に亘る。一方で、以前筆者が実施した「趣味的サークル」(中溝1999)のような活動に参加している人は、フルタイムで仕事をしている人ではいなかった。「団体で行う趣味の活動」で、そのためには「ある一定のスキルが必要」な余暇の団体には所属していないのである。その理由の一つとして、大手企業で忙しく働き、定年間近まで役職に就いて長時間仕事を行い、または地位による定年延長によって、定期的にスキルを磨くような余暇活動を行う時間がなかったことが挙げられる。これは今回の対象者のすべてに当てはまることではないが、専業主婦や夫の自営の手伝いをしてきた女性を除けばほぼ該当している。ある意味、筆者の言う典型的な「余暇に対する準備のない高齢者」だったのである。もう一つは推測の域を出ないが、アッパークラスは「大きく群れない」という特徴があるように感じられた。少人数の親しいグループを形成してゴルフや旅行をするが、たくさんの人が一堂に会する余暇の活動や、定期的な活動への参加が要求される団体への所属はあまりしない。上述したが、「趣味的サークル」というもの自体が中間階層の活動だからなのかもしれない。また、矛盾するようだが、彼／彼女ら

はロータリークラブなどに所属し、その中で行われる「趣味的サークル」的な活動には参加することもある。自らの所属する階層意識がそのようにさせているのかもしれない。

6. 2 結論

これまで見たように、高齢者の旅には様々な意味があるが、元気なうちにたくさん旅行に出かけようとする発想は若い世代にはないものであり、ある種高齢者特有の考え方と言えるであろう。人生の満足感を高めるためであったり、また、旅行に行けるだけの健康が失われた時に後悔したくないという思いがあったりするのかもしれないが、いずれにしても、ふだんの生活に溶け込んでいる日常的な余暇活動での調査では聞かれなかった話であった。今回、高齢者に話を聞いたため、過去を振り返ってもらうことでライフサイクルによる旅の意味の違いについても知ることができた。事前にある程度想定されたことではあったが、やはりその人の生活状況は旅という活動の意味や目的、さらにはその内容にまで大きな影響を与えていた。また、旅の持つ非日常性については、高齢者だからというのではなく、旅行の頻度や自由時間の多少によってそれが程度規定されるということを知ることができた。

充実した余暇生活を送る「幸せな高齢者」を増やすことは社会にとって決して悪いことではない。それ以下の若い世代にとって、年を取ることに積極的な意味が見出せるようになるからである。老後にまったく期待ができなければ長生きをしたくとも思わないし、刹那的な人生観にもなるかもしれない。豊かな人生や充実した老後を送る高齢者のモデルを示せないことは、社会にとって不幸である。当面増え続ける「余暇に対する準備のない高齢者」の生活の質を高める手段として、旅行が有効に機能するのであれば、外国人旅行者を呼び込むインバウンドだけでなく、日本人の余暇の一つとして積極的に「旅」の意味を見出すことも大切である。しかし、長期的な視点で見ればそれだ

けで十分とは言えない。なぜなら、現在の我が国に暮らす人の余暇時間は人生の後半に大きく偏っており、現役就労時代の長時間労働という長く厳しいトンネルを健康に切り抜けた「サバイバー」のみが豊かな余暇生活を送る最低条件を手に入れられるという現実があるからである。したがって、ライフサイクルにおける人々の生活や人生そのものを豊かにするためには、働いている時からの「(休息という意味ではなく)積極的な余暇の活動」への取り組みが重要である。現在、取り組まれつつある「働き方改革」は大切であるが、それが成果を上げるためには余暇や遊びに対する潜在的な「後ろめたさ」(中溝 2017: 224, 239 注 20)を社会の意識として減らしていくことも不可欠である。社会全体で労働の物理的・時間的な改善を図るとともに、個人として仕事以外の楽しみを増やす努力も必要になってこよう。そうでなければ、長生きをしなければ充実した余暇を享受できないという状況が続くことになる。

6. 3 今後の研究課題

「旅行」は人間関係の煩わしさや、活動に際して特段のスキルも必要としないという意味において、余暇の準備ができずに定年を迎えた人にとってハードルの低い優れた余暇活動と言える。またそのニーズは大きく、余暇活動の潜在需要(希望率-参加率)の上位3つは「海外旅行」、「国内旅行」、「クルージング」¹⁹⁾と、旅に関係するものとなっている。一方で、「旅行」は日常的余暇活動に比べて「金」「時間」「健康」をある一定水準で要求してくる。これらの条件をクリアできる人にとっては満足感の高さも含めて非常に効率の良い余暇の活動であるが、その条件が満たされない人にとっては逆に、非常に参入障壁の高い余暇活動である。今後、より大きな問題となることが予想される経済格差²⁰⁾の広がりや生活困窮者²¹⁾の増加、生活保護受給者のギャンブルなど²²⁾、余暇を取り巻く状況は厳しく、取り組むべき課題も多い。

余暇は「何かを行う活動」という訳では必ずしもない。「何もせずのんびりする」という行為も立派な余暇活動である。問題は「何かしたいのに何をすればいいのかわからない状態」と「やりたい余暇はあるのに、時間や金銭的な制約によってそれが実現できない人たち」にある。今回の調査は「行きたい旅に自由に行くことができる層」を対象としていたが、今後はその自由を持たない層について眼差しを向けていく必要があると考える。

【調査について】

調査名 「高齢アッパークラスの旅行・観光における余暇としての位置づけについて」

調査者 中溝一仁（単独）

対象者 現役時代にある一定の社会的地位があり、現在ある程度生活に余裕のある60歳以上の12名（うち男性8名 女性4名）

調査地域 静岡市内

期間 2017年8月～11月

方法 半構造化インタビュー

面接調査における主な質問項目は以下の通り。フェイスシート項目は割愛。

(1) 日常的余暇活動について

1. 現在、ふだんから（比較的）定期的に行っている余暇活動やスポーツはありますか？
2. 以前に（比較的）定期的に行っていた余暇活動やスポーツはありますか？
3. テレビやインターネットの利用状況について
4. 現在の楽しみは何ですか？

(2) 非日常的余暇活動について

1. 演奏会を聴きに行ったり、余暇としての旅行をしたりなど、非日常的な余暇はどんなことをしていますか？
2. その活動の頻度を教えてください

(3) かつての仕事の忙しさについて

1. 帰りは何時くらいでしたか？
2. 土日はお休みできましたか？
3. 当時、余暇としての旅行は行っていましたか？（家族旅行も含む）
4. 当時は出張で旅行に行くことができましたか？

(4) 現在の旅行の位置づけ

1. かつてと今では「旅行の位置づけ」がご自分の中で違っていますか？
 2. かつての旅行と今の旅行、誰と行っていますか？
 3. 旅行と一緒に行く人は仕事関係ですか、プライベートですか？
 4. その人と知り合ったきっかけは余暇、仕事、学校、その他ですか？
 5. 現在の出張は旅行・観光と兼ねて（含まれて）いますか？また、かつてはどうでしたか？
 6. 昔と今で旅行の際の掛けるコストのかけ方は違いますか？（交通手段、グリーン車、宿泊するところ、行くところ、お土産の量、額など）
- (5) これからについて
1. これから取り組んでみたい余暇活動は？
 2. これから行ってみたいところは？
 3. 上記以外で、これからやってみたいと思うことはありますか？
- (6) 仕事関連
1. 現在の仕事の状況
 2. 現在仕事をしている人は、今後仕事を増やしたいですか？減らしたいですか？今後、仕事をどのようにしていきたいと考えていますか？
 3. 正規職を退職した年齢
 4. その後の就労、仕事の状況
 5. 加齢に伴い、少しずつ仕事色が減ってきている感じがしていますか？
- (7) 生活の満足度に関する項目
- (8) プライベート
1. 夫婦でよく出掛けますか？
 2. 夫婦関係は良好な方だと思いますか？

【回答者と回答の概要】

回答者の表記をイニシャルにしなかったのは匿名性を高めるためと、同年齢、かつ同一のイニシャルが複数あったためである。なお、本文中の年齢表記は調査時点である。

A氏、64歳男性。大学卒業後、大手上場企業に就職。同社を50歳代後半で早期退職し、NPO法人を設立、代表理事に就任。子供2人は独立し、現在は妻と2人暮らし。会社員時代は2年に1回くらい国内出張があり、後ろに有給休暇をくっつけて2日目に現地を観光していたという。結婚後、結婚記念の大きな区切りの

年には夫婦で旅行に出掛けている。旅をする目的は「妻との共有体験を増やすため」と言い夫婦仲は良好。ふつうの旅では面白くないので、キャンピングカーを借りたり、四国の巡礼に行ったり、海外のフルマラソンに参加したりして、旅にイベントなどを付加して目的を「旅単独」にしていない。仕事以外の旅は専ら妻と一緒に、友人夫婦とともに出掛けることもある。現在の趣味は健康のために週1回程度行うジョギングと、各種セミナーに参加すること。約3ヶ月に1回、刺激を受けるために東京に行っている。

B氏、69歳女性。大学卒業後、父が経営する会社に入社。経営を引き継ぎ20歳代から代表取締役を務める。離婚を経験し、現在は40歳代の子供と2人暮らし。幼い頃から祖母や母に連れられて頻りに旅行に出掛けている。この時の旅は、そのほとんどが観光か銀座でのショッピング。学生時代は旅行サークルに所属。就職後は月に1~2回泊まりで出張に行く。その際、隙間時間を見つけて近くの観光地にタクシーで足を運んだりしたという。現在は温泉が好きでよく出掛けるという。相撲を観に行ったり、演奏会もよく聴きに行ったりするというが、これらの目的のために旅をすることもあれば、観光が目的で旅をすることもある。現在の趣味は考古学や歴史の講座への参加、健康体操、30年続けている文化サークルの活動など。日帰り旅行も含め頻りに出掛けているため、旅が日常的な活動の一部となっているようだった。県の評議委員等、非常に多くの公的な役職を歴任し、現在も継続中のものが複数ある。

C氏、77歳男性。大学卒業後、在京キー局に就職。海外特派員等を経てローカルテレビ局の代表取締役社長、会長、相談役、顧問を歴任。現在の趣味の活動は年4回のゴルフと月1回の合唱団の練習、毎朝の富士山の写真撮影。普段からクラシック音楽を聴くのが好きで、オーケストラをはじめとした演奏会には月に2,3回足を運ぶという。市内のこともあれば、東京や京都など、それが旅行となることも多々ある。移動中にノンフィクションを読むことも楽しみの一つだという。講演会やセミナーなども時間が許す限り参加する。「人を知る」というテーマを常に持ち、人と議論したり、頭を使ったりする活動が好きで、寝る以外はあまり家におらず、年間180日は旅に出ている。数年前から自ら社団法人と株式会社を設立して実務も行い、テレビ局顧問の仕事から解放されたのは今年である。子供は

独立し、現在は妻と2人暮らし。

D氏、62歳男性。学部、修士、博士課程と進み研究職、大学教員を務める。若い頃は研究目的で海外に行くことも多かった。学生時代は先輩とともに列車の旅によく出掛け、30歳代半ばまでいわゆる「乗り鉄」をしていて、それがこの時期の最大の趣味だったという。現在の趣味は妻と歩くこと。子供の成長をとっても楽しみにしていて、学校行事にも積極的に参加している。現在も執筆活動を行い、雑誌に連載を持っている。最近あまり旅には出ず、非日常的な活動は少ないという。かつて、一緒に行く人がいるときは頻りに出掛けていたが、一人ではあまり旅に出ない。旅行以外のことに関しては消極的ではないが、旅に関してはそれほど前向きな姿勢は感じられなかった。しかし、昨年は一人で視察を兼ねて1週間程度海外に旅行している。1日10時間はパソコンの前に座り、インターネットやフェイスブック、執筆活動をしている。妻と子供の3人暮らし。中学生の子供がおり子育て中という点で、他の回答者とライフサイクルが異なる。

E氏、70歳男性。大学卒業後、就職。その後大手広告代理店に転職。30歳前に会社を辞め、地元で父が経営する会社に入社。その後、経営を引き継ぎ代表取締役に就任。余暇活動としてはゴルフを月に3回程度、30年ほど続けている。また3年前から毎朝筋トレとラジオ体操を欠かさずに行っているという。ロータリークラブの活動は二十数年続けている。昔から旅行は好きだったという。子供は独立し、現在は妻と2人暮らし。

F氏、77歳男性。大学卒業後、上場企業に就職。関連する十数の子会社の社長を歴任し、75歳まで理事を務めていたため、現役を退いてからまだ2年である。日常的な余暇活動として小唄を25年くらい続けている。また、3,4年前から囲碁を月に2,3回をやっているが、これはブランクを経た再開であり、社会人になりたての頃、得意先に囲碁好きがおりその人と一日おきくらいのペースでやっていたという。旅に関しては、現役時代の若い頃には頻りに出張に行っている。役員就任以降はある程度仕事量を自分でコントロールできたため、出張ではない旅行にもよく出掛けたという。月に1回は国内旅行に行き、その中には演奏会や美術館巡りも含まれている。年2回程度の妻との海外旅行は長く続けており、南アフリカ、アジアからヨーロッパまで、また北欧も何回か行っているという。子供は独立し、

現在は妻と2人暮らし。

G氏、73歳男性。大学卒業後、地元のマスメディアに就職。関連会社副社長、本社役員、常務取締役を歴任、69歳まで常勤顧問を務める。退職後は東京の企業の監査役に就任、月に1度会議に出席する。学生時代から旅行が好きでバイトをして金を貯めて、サークルの旅行や友人達と旅に出ているという。現在の余暇活動はゴルフを月に2,3回、ウォーキングは雨の日を除く毎日、60歳を過ぎてから登山を始め67歳くらいまで続ける。72歳から囲碁を始めて現在までは毎日パソコンで打っている。年末にベートーヴェンの第九を歌うグループの活動(参加団体は途中から変更)に参加し、毎年本番のステージに立ち今年で13回目。現役就労時代から積極的に出張に行き、そこに自費で1日宿泊を追加して出張先の観光を楽しんだという。また役職の上昇とともに国内出張も増え、年に10回程度の泊まりがあった。海外旅行も好きで、仕事でもプライベートでも十数回海外を旅している。現在は海外も含め、年間6~8回くらいは旅行をしている。一緒に出掛ける相手としては、かつて仕事で知り合った関係がそのままプライベートの関係として残り、以前は仕事の懇親会として行われていた旅行からオフィシャルな部分が抜ける形で現在でも続いている。「ゴルフも、歌も、旅行も、誰と一緒にそれをするか、が重要」だという。近年は妻と二人で海外旅行にも行っている。子供は独立し、現在は妻と2人暮らし。

H氏、68歳女性。専門学校卒業後、結婚。以後専業主婦。結婚後、子育て中も含めあまり旅行には行かなかったという。夫が自営業で忙しく家族旅行も行かず、隣県の実家に子供を連れて帰る程度だった。しかし、夫が早くに現役を退き時間が自由になってからは堰を切ったように夫婦で旅に出始める。60歳を過ぎてから海外旅行に何度か行き、その後は毎月1回以上のペースで国内ツアー旅行に出掛ける。62歳になってから頻度を少し落として年に2,3回のペースで、船で国内の内外を旅するようになった。また、それとは別に国内のツアーに年3回程度参加している。現在の日常的な余暇活動はフラワーアレンジメント講座、フットケア講座、ヨガ講座にそれぞれ月に1回参加しフィットネスジムにも週3回ほど通っている。近くに住む孫の成長を非常に楽しみにしていて、幼稚園の行事に参加したり、子守の手伝いをしたりすることに生き甲斐を感じている。現在の生活上の楽しみが、日常的余暇活動と

旅行と孫の3つから構成されている。子供は独立し、現在は夫と2人暮らし。

I氏、68歳女性。高校卒業後、専門学校を出て5年間看護師として病院で働く。その後、看護教員の研修を受け、10年間看護教育に携わり、管理職を歴任。現在は病院を退職し、関連協会に再就職。フルタイムで業務に従事する傍ら、大学関連の業務や公的な役職にも複数就いている。仕事が忙しく長期の旅は希望があっても実現できないが、現在の楽しみについては「孫の存在」を挙げていた。「それはもう楽しみ。孫の面倒が見られたらすべて仕事を辞めてもいい。一番楽しい。楽しみの種類が違っている」と述べ、その可愛さを「魔物」と表現していた。「(自分は)好奇心旺盛なので、今まで知らなかったことを知ること」や「今まで出会えなかった人たちと出会うこと」、「肩書きを外してつきあえること」も楽しみだという。子供は独立し、現在は夫と実母の3人暮らし。

J氏、74歳男性。大学卒業後、地元に戻り家業を継ぐ。これまでの最大の余暇は20年間続けた劇団の活動という。今年最終公演を行い、解団。回答中に何度も語られるが、この活動によって旅行が制限され、また台詞を覚えなければならぬなど、活動の参加から派生する様々な義務が「すごいストレスだった」と言う。「これからは自分のためだけに人生を特化して、気ままに旅行に行きたい」とも述べていた。そこまでのストレスを抱えてまで余暇の活動である劇団を続けることの理由を尋ねたところ、「本番の達成感が凄い」からだと言う。その他、趣味の活動は広範に及び、ウォーキング、篠笛、三味線の演奏、映画鑑賞、語学を学ぶことをその時々でかなり熱心に行っている。現役就労時代の旅は、家族旅行1回と仕事の出張のみだったという。引退後は3,4年くらいの間、妻と毎年2回程度、海外旅行に出掛け、それとは別に国内も旅をしたという。その後、劇団での役職の責任が増し、妻の体調の問題もあり、1泊2日程度の国内旅行とたまに海外旅行に行く程度だという。子供は独立し、現在は妻と2人暮らし。

K氏、62歳男性。大学卒業後、一般企業に就職し営業の仕事をしてきたが、その後会社を辞めしばらくは働かず、勉強をして教員採用試験を受けて小学校教諭になる。教頭、校長を歴任し、現在は教育関連団体の事務局長に従事する。フルタイムで働き、大学の非常勤講師も行っている。現在の余暇は、街づくりの活動

やNPO法人の活動の手伝い、子供の学習支援や英語の勉強会への参加など、多岐に亘る。大学時代にスキーを始め、就職後もしばらくは「冬は狂ったようにスキーをやっていた」が、30歳代後半から行っていないという。凝り性で、映画にはまっている時期や、ミュージカルにはまっている時期もあった。子育て中は日帰りも含め、数え切れないくらい家族旅行に行ったという。ディズニーランドには修学旅行の引率も含め40回くらい行っている。また、当時はワンボックスカーで妻子と、両親も連れて1泊2日のキャンプに出掛けたりしたという。家族とは1回だけ海外旅行に行っている。国内での出張はこれまで60回くらいあった。近ければ日帰り、遠ければ1泊するが、早く帰りたいので観光はまったくしなかったという。「現在の楽しみは何か」の質問に対しても「いろいろなことを知ること。どっかに行って『おーっ』と気がついたりすること。今年もシンガポールに妻と出掛けたが、行く前に予め本を読んで勉強しておく。そうすると視点が増えて面白い」と回答している。現在は、頻繁に国内外を旅行しているが、そのきっかけは、「子どもたちが大学を出て、時間もお金も余裕ができて、そろそろいい年齢かなと思ったから」と言う。現在は妻と子の3人暮らし。

L氏、72歳女性。高校卒業後、一般企業に就職していわゆる「OLをしていた」という。26歳の時、結婚を機に仕事を辞める。子育て中も自営の夫の仕事を手伝い、この時期にはほとんど旅行には行っていない。現在の趣味は、6年目となるフラダンスと今年始めたピラティスをそれぞれ月に2回。散歩は1週間に3回程度、30分くらい家の近くを歩くという。現在も週に2回程度、自営の店を手伝っているが、今後は地域のボランティア活動や高齢者介護の手伝いをしたいと考えている。しかし、現状では仕事や孫の面倒が忙しいから無理だという。子供は独立し、現在は夫と2人暮らし。

【参考文献】

- 公益財団法人日本交通公社, 2017, 『旅行年報 2017』公益財団法人日本交通公社。
- 公益財団法人日本生産性本部, 2015, 『レジャー白書 2015』生産性出版。
- 国土交通省 観光庁編, 2016, 『平成 28 年度 観光白書』昭和信息プロセス株式会社発行。
- ツーリズム学会編集委員会編, 2006, 『新ツーリズム学原論 —自由時間社会の豊かさの質とは—』東信堂。
- 内閣総理大臣官房審議室編, 1970, 『観光の現代的意義とその方向 内閣総理大臣諮問第9号に対する観光政策審議会答申』大蔵省印刷局発行。
- 内閣府, 2017, 『平成 29 年版 高齢社会白書』。
- 中溝一仁, 1999, 「趣味的サークルのもたらす満足感とその存在意義について」立教大学大学院社会学研究科論集第6号 (pp.85-97)。
- 中溝一仁, 2005, 「高齢社会における余暇問題」立教大学社会学研究科年報第12号 (pp.57-67)。
- 中溝一仁, 2017, 「高齢社会における日常的余暇活動への参加と生活の満足度について」立教大学社会学部応用社会学研究No.59 (pp.223-240)。

【注】

- 1) 平成 29 年 9 月 15 日現在の推計で高齢者人口の割合は 27.7% (総務省統計局発表)。
- 2) 『平成 25 年版 警察白書』より。高齢者による犯罪は、その背景として「規範意識の低下や地域社会における高齢者の孤立化等があることがうかがわれる」という。<http://www.npa.go.jp/hakusyo/h25/honbun/html/pf242000.html>
- 3) 日本は 2017 年も引き続き名目 GDP で世界第 3 位である。
- 4) 国連の幸福度ランキング (2017 年 3 月 20 日発表) によると、世界 155 カ国の中で日本は 51 位だった。調査では、幸福度は「GDP」、「他者への寛容さ」、「健康寿命」、「頼れる相手がいること」、「人生を選択する自由」、「汚職のない社会」という項目で点数化されていて、一般の人が感じる「幸せ」と一致しているとは必ずしも限らないが、各国を比較するための一つの指標として用いることはできるであろう。
http://worldhappiness.report/wp-content/uploads/sites/2/2017/03/HR17_3-20-17.pdf
- 5) 『平成 29 年版 高齢社会白書』(p.21:図 1-2-3-3) より。2013 年と 2001 年を比較すると、男性の平均寿命は 2.14 歳伸びているが健康寿命は 1.79 歳しか伸びていない。したがって、この間に健康でない期間が 0.35 歳長くなっていることになる。女性は男性ほどではないが、同様に若干長くなっている (図より筆者が算出)。

- 6) 減りつつあるとは言え2016年の60歳以上の自殺者数は8,871人である。「平成28年中における自殺の状況」(p.18)より筆者が算出。https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H28/H28_jisatunojoukyou_01.pdf
- 7) 「働き方改革」というキーワードをGoogle Trendsを用いて調べたところ2017年1月から検索キーワードとして急激に増加してきていることが分かる。<https://trends.google.co.jp/trends/>
- 8) 「平成29年度 年次経済財政報告」の「第2章 働き方の変化と経済・国民生活への影響」では、働き方改革による労働生産性への影響や国民生活への影響が58ページにもわたって述べられている。長時間労働の是正などによって生産性が向上するといったすでに幅広く議論されている内容に加えて、働き方改革による余暇時間の増加についても議論されていることが今回の特徴である。例えば、下記のような記述がある。「日本では一人当たりの労働時間は減少してきたが、国際的にみると、いまだ総労働時間は相対的に長く、その反面として、いわゆる余暇時間は短い」(p.102)。<http://toyokeizai.net/articles/-/193499>
- 9) フランスにおいては、年次有給休暇は、5週間取得可能で、5月1日～10月31日に4週間、そのうち2週間は連続して取得することが義務付けられている。また、学校の休暇を分散させるため、冬休み(2月)と春休み(4月)については、国内を3つのゾーン別に分けた上で、2週間ずつずらし、学校休業時期を分散する取組を実施している(『平成28年度 観光白書』p.97より)。
- 10) 『平成28年度 観光白書』によると、「盆休みやゴールデンウィーク等の一部の時期に集中しており、月別の延べ宿泊者数を見ると、繁忙期と閑散期に大きな差」(p.97)を生むという問題を引き起こしている。
- 11) 『観光の現代的意義とその方向 内閣総理大臣諮問第9号に対する観光政策審議会答申』(p.13)より。
- 12) 『新ツーリズム学原論 ー自由時間社会の豊かさの質とはー』(p.7-8)より。
- 13) 『旅行年報2017』(p.66)を参照。
- 14) 47都道府県の中で静岡県が様々な経済指標で全体の3%程度を占めていることを表す表現。
- 15) 「平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果」(内閣府) Q1、Q2の回答より。<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/sougou/gaiyou/pdf/kekka1.pdf>
- 16) 文末の【回答者と回答の概要】のI氏の箇所を参照。
- 17) 『レジャー白書2015』では、「旅行の趣は季節の違いだけでなく、どのような人と時間を共有したかによっても多様性を増す」(p.157)ことを指摘している。
- 18) 文末の【回答者と回答の概要】のA氏の箇所を参照。
- 19) 2014年の調査。『レジャー白書2015』(p.28)を参照。
- 20) 厚生労働省の報告書によると所得再分配後のジニ係数は改善され格差は広がっていないというが、その多くが社会保障費の再分配に依存しているため、平均としての可処分所得に変化はなくとも、健康な個人々の格差は広がっていると考えられる。また、所得の再分配によるジニ係数の改善は政策に依存するため世代間の格差も問題となる。厚生労働省「平成26年 所得再分配調査報告書」厚生労働省政策統括官(総合政策担当)より(<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12605000-Seisakutoukatsukan-Seisakuhiyoukakanshitsu/h26hou.pdf>)。また、格差は40歳を超えると年齢と共に広まっていく。『高齢社会白書 平成29年版』(2017:17 図1-2-2-4)参照。
- 21) 厚生労働省が新たに生活困窮者への支援の基本理念を作成し、その中に初めて「地域社会からの孤立」という表現が盛り込まれ、地域づくりや地域社会との関係性が重視されるようになった。社会的な孤立を防ぎ、つながりを促進する一つの方法としての余暇活動が今後ますます重要となるであろう。厚生労働省ホームページ「生活困窮者等の自立を促進するための生活困窮者自立支援法等の一部を改正する法律案の概要」より。<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/soumu/houritu/dl/196-06.pdf#search=%27%E7%94%9F%E6%B4%BB%E5%9B%B0%E7%AA%AE%E8%80%85+%E6%B3%95%E5%BE%8B+%E5%AD%A4%E7%AB%8B%27>
- 22) 生活保護受給者の余暇活動は今後、重要な問題としてクローズアップされる可能性が高い。厚生労働省の調査によると、自治体が生活保護受給者に

パチンコや競馬などのギャンブルに生活費を使い過ぎている恐れがあるなどとして指導・助言を行った件数は、2016年度で3100件だったという。指導内容は「パチンコ」が2462件で約8割を占め

た。次いで、「競馬」が243件、「宝くじ・福引」が132件と続いた。朝日新聞2018年1月25日（朝刊）37面記事より。